

# ソマリア政治史における イスラームの変遷とその現在

遠藤 貢

## はじめに

ソマリアを中心に活動するイスラームの過激派勢力としてのアッシャバーブ (Al-Shabaab) は、その攻撃手法によりいわゆる「テロ組織」として評価される場合が多く、実体としてもそうした特性を備えている。しかし、こうした観点からのみアッシャバーブに注目することは、その性格を十分に理解することにはつながらない<sup>1)</sup>。2000年代前半の創設期から15年に及ぶ時間を経た現在においても、最盛期とされた時期の1万名程度の規模からは減少してはいるものの、依然として数千名の規模を維持しているとみられるほか (Jones, Liepman and Chandler 2016)、東アフリカにその勢力を拡大する傾向 (Bryden and Bahra 2019) にある背景については改めて検討の必要な課題となっている。その意味では、アッシャバーブはアフガニスタンから持ち込まれ、アルカーイダの影響を強く受けてきた組織である側面をもちながらも、「ソマリアにおける政治的イスラームの歴史から産み落とされた存在」(Marchal 2011a, 261) という観点からの捉え直しの作業が改めて必要となる対象なのである。

こうしたアッシャバーブの活動の継続性とその意味を検討することをねらいとしながら、本章では、おもに独立以降のソマリアの政治史とソマリアにおけるイ

1) この点については、アッシャバーブに関する最近の論集や、ジャーナリストによる取材でも明らかになってきている (Keating and Waldman 2018; Harper 2019)。

スラームの変容との関係を改めて読み直す作業を行う。この作業を通じて、一方では現状におけるソマリアにおける政治的イスラームの配置状況(configuration)につながる動きを描くとともに、「なぜ、アッシャバーブはソマリアにおいて一定の勢力を維持し続けているのか？」という問い立てへの一定の答えをおもにソマリアのイスラームの観点から与えることを目的とする。なお、本章では、ソマリアを越えた東アフリカ地域への展開という課題までは触れないが、近年のソマリアを取り巻く国際関係の観点から、今日のソマリアの政治状況に関しても一定の検討を行う。

本章は以下のように構成される。まず第1節において、ソマリアにおけるイスラームの歴史的背景を描く。第2節においては、独立後の政治文脈における政治的イスラームの動きについて検討する。第3節において、ソマリアにおけるイスラームの現代的文脈におけるアッシャバーブの誕生とその意味について分析する。そしておわりに、改めてソマリアの今日的な文脈におけるアッシャバーブの評価を行う。

## 1 ソマリアにおけるイスラームの歴史的背景

### 1-1. スーフィー信仰とタリーカ

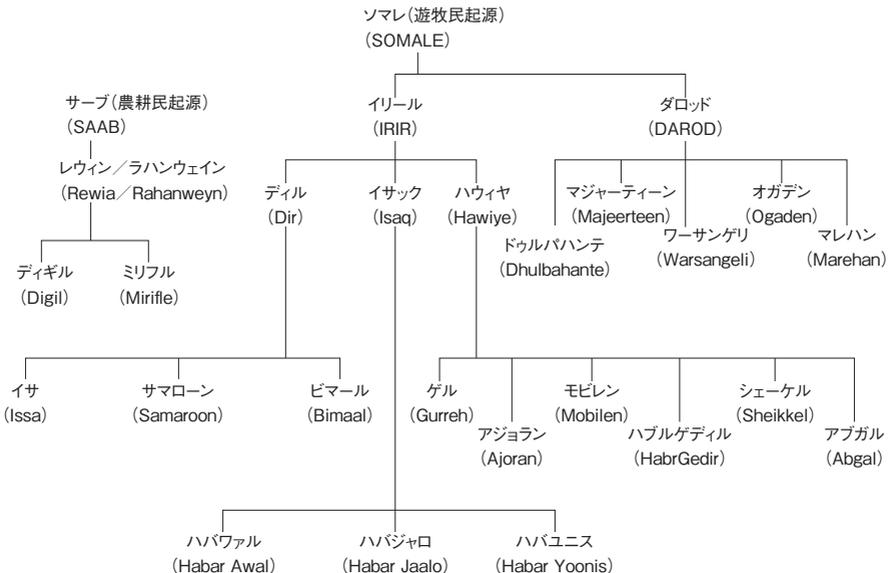
ソマリアにおけるイスラームの歴史は1000年を超えるとされ、そのほとんどが穏健なスンニー派に属し、基本的には政治性をもたないスーフィー(Sufi)信仰を中心としていると考えられてきた(Lewis 1998; ICG 2005, 1)。これはソマリ人のクラン社会における聖人崇拜や祖先への敬意の慣習との親和性があることが背景にあるともみられている。また、複数のタリーカ(tariqa)<sup>2)</sup>とも関係している。イスラームの影響は長い間沿岸部に限られ、内陸地域への拡大は比較的最近とみられており、この拡大に大きな役割を担ったのが、タリーカの活動であった。しかし、数多くのタリーカが存在しており、それぞれの影響力は限定的とも

---

2) タリーカは、元来「道」を意味するアラビア語であり、スーフィー信仰の文脈では、真理、神そのものへいたる道を指している。タリーカの修行者がスーフィーと呼ばれる(藤井 2018, 51)

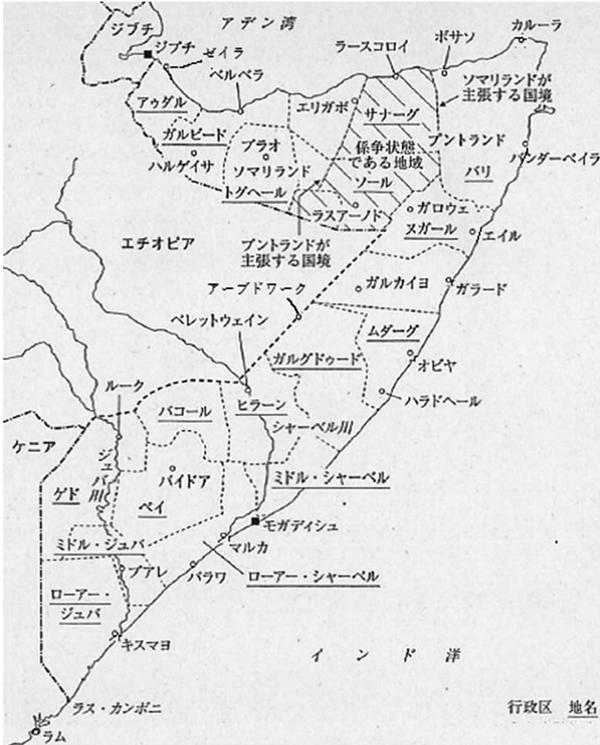
みられている。ソマリアにおけるおもなタリーカには、次のものがあるが、それぞれのタリーカの拡大にはその宗教的指導者であるシェーク (shaykhs) の影響が非常に大きい (Lewis 1998, 11-14; Marchal and Sheikh 2013, 217-9)。初めにアラビア半島からゼイラ (Zeylac) やモガディシュ (Mogadishu) といった沿岸部の中心地に15世紀頃に導入されたのが、ソマリア最古とされるカディリー教団 (Qadiriyya) である (Renders 2007, 48)。19世紀前半以降内陸地域にも広まり、ラハンウェイン (Rahanweyn) やマジャーティーン (Majeerteen) といったクランに広く浸透した (図3-1参照)。そこから分かれた教団が複数存在し、そのひとつがアウェシー教団 (Awesiyya) であり、拠点をおもに南部ではラハンウェインにもつとともに、北部ではイサク (Isaaq) やドゥルバハンテ (Dhulbahante) といったクランに広がりをもたした。ほかにもルファイー教団 (Rufaiyya) が、マルカ (Marka) やバラワ (Baraawe) など南部の沿岸地域に団員を有したが (図3-2を参照)、アラビア半島やペルシャからの移民の子孫が中心であった。カディリー教団の特徴としては、政治的な主張をほとんど行わず、政治指導者にも抵抗

図3-1 ソマリのクラン系図



(出所) Lyons and Samatar(1995, 9), Brons(2001, 18-29)を修正して筆者作成。

図3-2 ソマリアの地図



(出所) Murphy(2011, xiii)掲載の地図をもとに筆者作成

姿勢を示さない点にあり、その基本姿勢は1990年頃までおおむね踏襲されていた (Marchal and Sheikh 2013, 219)。

これに加え、19世紀の前半には、アラビア半島での宗教改革の文脈で現れた新興のスーフィー・タリーカが誕生したが、これらは好戦性や、シャリーアへの強い指向性をもつとともに組織的にもより集権化された体制を求める点に特徴があった。この系譜に属するのが、アフマディー教団 (Ahmadiyya) であり、ソマリアでは、カディリー教団に次いで重要なタリーカであり、南部のマルカのディギル (Digil) やビマール (Bimaal) などのクランにその団員がいた。アフマディー教団との関連を有するタリーカとして一定の重要性をもつのが、ラシディー教団 (Rashidiyya) とサリヒー教団 (Salihyya) であった。アフマディー教団は、政治そのものが報われない (ゆえに常に窮地に封じ込めておくべき) 活動であると

いう見方を有していた (Marchal and Sheikh 2013, 219)。

ソマリア社会において、シェークは高い名声を得る地位にあり、基本的にクラン内部のもめ事には関与しなかったが、クランの集会や解決策の見つからない問題において助言を与えるなどの役割を担った。しかし、タリーカ間の対立も存在していた。1899年に英国の保護領となったソマリランドでは、「マッド・ムラー」(Mad Mullah) として知られるオガデンの詩人であり政治家だったサイード・マハメド・アブディ・ハッサン (Sayyid Maxamed Cabdille Xassan) に率いられた反植民地運動は、一方においてサリヒー教団のシェークであったが、ハッサンがカディリー教団を標的にする活動である側面を有していた<sup>3)</sup>。また、脱植民地に向けた取り組みの中心となったソマリ青年連盟 (Somali Youth League: SYL) においても、その創設者13名のうちスーフィー教団からシェークを含む4名が関与していた (Marchal and Sheikh 2013, 219-20)。

## 1-2. 政治的イスラームの「原型」(proto-type) の出現

スーフィー信仰とは異なる政治的イスラームがソマリアに現われるのは独立後の1960年代であった。この時代には、従来のスーフィー教団の考え方とは異なる宗教者が現れる。その多くはエジプトのアル・アズハル大学 (Al-Azhar University) やサウジアラビアのメディナ (Medina) の大学などで学んだ人たちであり、ソマリアにおける新たなイスラームの役割についての見解をもつようになっていた。そして、この過程でソマリアへの影響力が強まる傾向にあったのがムスリム同胞団の思想であった (Abdullahi 2015, 160)。

1967年に設立されたイスラーム復興機構 (アル・ナダー) (Munadamat al-Nadaha al Islamiyah: al-Nadaha) は、こうした新たな潮流のなかで、とくにイスラーム教育に焦点を当てた重要な組織であり、そのメンバーの多くがエジプトやサウジアラビアで教育を受け、帰国した学生たちであった。このアル・ナダーはエジプトのムスリム同胞団の組織を複製した特徴を有していたほか、同年のイスラエルとの戦争での敗北といったアラブ世界の動勢のなかで世俗的なアラブナ

3) この点と関連して、デルビッシュ (Dervish) と呼ばれたこの運動の時代に、特定の人間や集団を不信仰者とみるタクフィールの考え方があったことを指摘する研究がある (Ingiriis 2018a)。

シヨナリズムに代わる新しいイスラームのあり方を模索する動きの文脈で生じたとも評価できるもので (Abdullahi 2015, 168), 政治に対するイスラームの影響力を高めることをねらいとしていた (ICG 2005, 1; Hansen 2016, 15)。

この時期にはほかにもイスラーム青年連合 (ワダー) (Waxda al-Shabaab al-Islaami : Waxdah) とイスラームの家族 (アル・アラーイー) (Jama'at al-Ahl al-Islaami : al-Ahali あるいは al-Ahli) が設立されているが, これらもアル・ナダー同様ソマリアにおけるムスリム同胞団組織の「原型」という見方がなされている (Abdullahi 2015, 182-203)。

### 1-3. 転換期としてのシアド・バーレ政権

1969年10月15日に発生したシュリマルケ (Cabdirashiid Cali Sharmaarke) 大統領の暗殺ののち, 10月21日には軍がモガディシュを制圧し, 11月1日にシアド・バーレ (Maxamed Siyaad Barre) 少将が最高革命評議会 (Supreme Revolutionary Council: SRC) 議長に就任した。この政権の下でとられた大きく2つの政策は, ソマリアにおけるイスラームのあり方に大きな変化をもたらした。その第1の政策が, 1972年の「革命記念日」に発表された, ソマリアにおける「文化大革命」と称されるソマリ語の (アラビア語表記ではなく) ラテン表記 (アルファベット表記) の導入である。そして第2の政策が, 1975年1月に男性と同等の財産権の規定を有する新たな家族法 (family law) の導入である。とくに後者の政策に対しては, ソマリアの多くのイスラーム組織が反対姿勢を示し, 大規模なデモが行われたが, シアド・バーレはきわめて抑圧的な対応を図り, 10名のシェークの逮捕・処刑を実施した。このなかにはスーフィーのタリーカに帰属する4名のシェークが含まれていた (Marchal and Sheikh 2013, 222)。

この事件を受けて, 新たに国家安全保障局 (National Security Service: NSS) が設立され, アル・ナダーにおけるイスラーム教育や, イスラーム法学者 (ulama) の国外への旅行などの監視が強化された。また, 自身もカディリー教団に属していたシアド・バーレは, スーフィー教団を動員して, 新しいイスラームの組織の封じ込めに当たる動きもみられた。とくに, カディリー教団とアフマディー教団のシェークを登用し, 法務省の宗教局長に当て, 国内のモスクでの活動などの宗教動向を厳しく監督する動きを強めた (Marchal and Sheikh 2013, 223)。

こうしたソマリアでの厳しいイスラームの統制期にサウジアラビア、エジプト、スーダンなどに出国し、そこでのイスラームの急進化を経験した宗教者たちが、ソマリアにおける次の時期のイスラームの組織化を担うことになる。とくにここで意識されるようになったのが、シャリーアの厳格な適用と（その意味合いは多様だが）「イスラーム国家」の樹立であった（Marchal and Sheikh 2013, 223）。

## 2 政治的イスラームの胎動

1970年代後半以降、ソマリアではおもに3つの新たな政治的イスラーム運動の動きが観察された（Marchal and Sheikh 2013, 223; Abdullahi 2015, 230-1）。第1は、基本的にアル・ナダーの系譜に当たり、ムスリム同胞団との強い関係にある改革運動アル・イスラー（al-Islah）であり、1978年7月に正式に設立された。アル・ナダーの指導者でもあったシェーク・マフムド・ガラヤレ（Sheikh Maxamad Garyare）が、初代の議長に就任した。第2は、アル・アーリーの指導者であり、シアド・バーレの弾圧を逃れたシェーク・アブドゥルカディール・ハジ・マームド（Sheikh Cabdulqaadir Xaaji Maxamuud）が中心となった、特定の間人や集団を不信仰者（Kafiir）と宣告するタクフィール（Takfiir）・イデオロギーを特徴とする系譜である。シェーク・アブドゥルカディールはサウジアラビアでこの信仰を告白し、1979年にエジプトを旅行した際にタクフィール・ワ・ヒジュラ（Takfiir wa al-Hijra）との関係を強めた。1981年に帰国したシェーク・アブドゥルカディールはアル・アーリーのメンバーを説得し、タクフィールの思想の受容を促し、タクフィール・ワ・ヒジュラのソマリア支部を創設した。結果的にアル・アーリーは消滅したが、タクフィール思想に同調できなかったメンバーは1980年にサウジアラビアで設立されたイスラーム信心会（ジャマ・アル・イスラミヤ）（Jama'a al-Islamiyya）に合流した。これが第3の動きである。この組織は、アル・アーリーにおけるムスリム同胞団系の思想をもつメンバーとサウジアラビアの大学を卒業したサラフィー主義に傾倒するメンバーから組織されたが、次第に後者（サラフィー主義者）の支配的な組織に変化していくことから、ソマリアでは最初のサラフィー主義組織として位置づけられ、また、明示的にシアド・

バーレ体制の打倒とイスラーム国家の樹立を打ち出した。

本節では、こうした動きを踏まえ、1970年代後半から、2000年代に入りアッシャバーブが設立される時期にいたる主要なイスラーム主義勢力に関する考察を行う。

## 2-1. アル・イスラー (Al-Islah)

1978年7月11日にサウジアラビアの首都リヤドで樹立されたアル・イスラーは、ソマリアにおける初のムスリム同胞団組織という性格をもったが、1989年にはイスラーム運動 (Islamic Movement in Somalia) に名称変更し、より広いメンバーに門戸を開くというねらいがあった (Abdullahi 2015, 247)。

アル・イスラーについて最も包括的な研究をしているアブドゥライは、エジプトでムスリム同胞団が設立されて半世紀、ソマリアでその最初の活動が確認される1950年代初頭から約四半世紀が経った1978年にアル・イスラーが設立された理由を以下の3点挙げている (Abdullahi 2015, 251-255)。第1に、ソマリアにおけるムスリム同胞団組織活動の準備が調えられた点である。アラビア語を教育する学校の増加、外部のイスラーム世界との交流、世俗化や近代化との対立、そしてソマリ語の表記に関わる論争といった独立後のソマリアを取り巻く課題が、新たなイスラームのあり方を求める動きにつながったという点である。第2に、シアド・バーレ政権への対抗という要素である。家族法の導入にみられた混乱やシェークの逮捕・処刑、そして結果的に敗北した隣国エチオピアとのオガデン戦争 (1977～78年) により、1978年4月には「マジャーティーンの将校を中心とした」とされたクーデタ未遂を含む国内情勢の不安定化が助長された。こうしたなかで、クラン間の対立が誘発される状況が生まれ、クランをベースにした新たな反体制勢力が生まれ始めていた<sup>4)</sup> ことから、政治的イスラームを根拠とした動員を図る組織の必要性が意識されていたということである。そして第3に、ソマリアからの出国を余儀なくされた学生やシェークらが世界で展開するイスラームの運動と

---

4) 1978年に、ナイロビでソマリ救世戦線 (Somali Salvation Front: SSF) が設立された。SSF は1981年には1978年のクーデタを企てたとされたマジャーティーンが中心となってエチオピア領内で設立されたソマリ救国民主戦線 (Somali Salvation Democratic Front: SSDF) に合流し、ゲリラ組織として活動を開始する (Abdullahi 2015, 253 fn.55)

改めて結びつきを強めることができた点である。

アル・イスラーは1980年代に徐々に成長を遂げたソマリアにおける最も論争的な政治的イスラームとされる。緩やかなクラブの連合体という性格を有しているほか、その考え方はエジプトやヨルダンのイスラーム同胞団の考え方を基本的に借用している (ICG 2005, 13)。その支持層は都市部の知識人や学生が中心で、現代世界におけるさまざまな挑戦に向き合うための改革・復興を唱えるものである。

シアド・バーレ政権崩壊後の1990年以降、アル・イスラーは人道活動や社会サービス（とくに教育）の実現にかかわる活動を展開している。論争的とされる理由は、たとえばアメリカとの関係において、一方ではアメリカとの関係強化の重要性を主張する一方で、アメリカの対テロ政策に対する批判的な立場を示すことなどが指摘されている。とくに、対テロ政策において、アメリカが「軍閥」の指導者にさえ依存する姿勢に対して、批判的とみられてきたのである。ただし、ICGは、アル・イスラーがソマリア社会におけるイスラーム主義の穏健化に貢献し、過激なイスラーム主義を根絶するうえでのパートナーとなり得る可能性をみていた (ICG 2005, 15)。この点は、アブドゥライが、アル・イスラーの特徴を「ソマリア国内、およびディアスポラの居住地域で活動する穏健なイスラーム運動」として評価している点と一定の整合性を有している (Abdullahi 2015, 255)。そして、1990年代後半にいたるまで、アル・イスラーはとくに都市部において最も影響力をもったイスラーム運動であった (Marchal and Sheikh 2013, 223)。

## 2-2. アル・イッティハード・アル・イスラーミーヤ (Al-Ithhaad Al-Islaamiyya: AIAI)

ジャマ・アル・イスラミヤと当時北部ソマリアのみで活動を行っていたユース・ユニティー (Wahdatu Shabaab) が中心となって1983年3月に設立されたのが AIAI である。マーカルらは、多くのサラフィー主義者が正式のメンバーではなかったものの、この AIAI が、ソマリアにおけるサラフィー主義を生み出した組織であるとの見方を示している (Marchal and Sheikh 2015, 145)。ただし、1980年代においてはその組織内の異質性が高かったこともあり、十分な成功につながったかについては留保する見方が示されている。シアド・バーレ政権崩壊

後、AIAIは大きな転換点を迎えることになる。

1991年4月にキスマヨ（Kismayo）の北約60キロメートルに位置するアラール（Araare）において、統一ソマリ会議（United Somali Congress: USC）の民兵とAIAIの一部兵力が対峙し、敗北を喫した（ICG 2005, 4-5）。この後、AIAIの兵力は、現在のプントランドに移動し、当時この地域を支配していたソマリ救国民主戦線（Somali Salvation Democratic Front: SSMF）と対峙し、再び軍事的に敗北を喫した（Hansen 2016, 17）。こうしたなかで、AIAIのメンバーの多くは聖戦（ジハード jihad）への動きを強めるよりは、呼びかけ（ダーク da'wa）を中心とした活動を行う方針を重視した（Marchal and Sheikh 2015, 149）。しかし、相次ぐ軍事的敗北により、AIAIはその組織的活動については、必ずしも明確ではなくなっていった。そして、AIAIのサラフィー主義者たちはとくに経済分野での活動を強めていく<sup>5)</sup>。この点は、従来からAIAIを研究している研究者から指摘されていた特徴でもあった（Tadesse 2002）。

また、この時期のソマリアにおける政治的イスラーム、とくにムスリム同胞団とサラフィー主義の相違を考えるうえでの興味深い点として、民兵のクラン出自があるとされる。とくに武力面で強いクラン出身者が、サラフィー主義に転向し、新たな宗教的アイデンティティを手っ取り早く手に入れ、一般的なソマリ人に比べ「より宗教的」な立場を得る手法が用いられる傾向があったのである。そして、こうして宗教的な転向を果たしたサラフィー主義者たちは、首都モガディシュにおいては民兵的な暴力行為からさまざまな交易やビジネスに関与するかたちで、たとえばアラブ首長国連邦（UAE）のドバイを拠点とする商人たちとのネットワークを確立する動きにもつながっていった（Marchal and Sheikh 2015, 147）<sup>6)</sup>。この時期、9・11同時多発テロ以降アメリカのテロ組織に指定されるようになるサウジアラビアのイスラームのNGOも、1990年代半ばにはソマリアで活発な活

---

5) たとえば、ラスアーノド（Laascaanood）における経済活動における重要性が指摘されてきた（Renders 2007, 58）。

6) 北部のソマリランドやプントランドにおけるサラフィー主義の浸透に関しても、ビジネスとの関係がきわめて強い傾向がある点において、サラフィー主義の拡大と経済活動が密接に関わってきたことが指摘されている（Marchal and Sheikh 2015, 151-2）。また、この時期北部のソマリランドにおいてもスーフィー信仰、とくにカートの常用に対する批判などが高まるかたちで、より厳格なイスラームへの改革を進める動きがみられた（Renders 2007, 52-3）。

動を展開しており、サラフィー主義者の起業家への資金援助を行うなど、ソマリアのビジネスにおける重要な地位を実現するうえでの支援を行った。このなかにはバラカット・ホールディング(al-Barakat Holding)のCEOでもあったアハメド・ヌール・アリ・ジマール (Ahmed Nur 'Ali Jim'aale) も含まれていた。そして、こうしたビジネスにおけるサラフィー主義者の経済的領域での影響力の強さは、スーフィー主義者やムスリム同胞団といった他のイスラームに集会的に対抗するうえでの能力を示していた。転向しなかった人々は、ビジネスにおいてより周辺に追いやられたのである (Marchal and Sheikh 2015, 148)。

1997年に、エチオピアの攻撃により大きな打撃を被ったAIAIは、その名称や組織のあり方の大きな変更に迫られることになった (ICG 2005, 9-10)。より急進的、そして軍事的に聖戦を展開する姿勢を示したサラフィー主義者であるサラフィー・ジハーディ (Salafi Jihadi) と呼ばれる勢力によって1997年に設立されたとみられるのがアル・イーティサーム (al-I'tiṣām bi-l-Kitāb wa-l-Sunna, al-I'tisaam) である。アル・イーティサームは軍事部門を維持するとともに、より急進的な改革思想であるワッハブ派に近づく傾向を示した。そして、ここに含まれなかったAIAIのグループとしてのアル・イーティハードが、基本的にジハードを放棄するサラフィー・ジャディード (Salafi Jadid) (新しいサラフィー主義) のもとに、チャリティ活動などを含む、上述の経済活動に深く関与していった (Marchal and Sheikh 2013, 227)<sup>7)</sup>。南部の勢力としての地域における有力なクランであるオガデンを支持母体として台頭する後のラス・カンボニ旅団 (Raas Kaambooni Brigade) を率い、この当時アルカイダとのつながりが指摘されたハッサン・ターキ (Hassan Abdullaahi Hirsii al-Turki) のキスマヨ近郊での活動指向性は、こうした動きの一部として位置づけられるものであった (ICG 2005, 6-7; Hansen 2016, 21)。そして、この動きがより本格化するのにはアッシャバーブの設立以降であった。

7) マーカルらのここでの記述には混乱がみられる。軍事的に聖戦を展開する姿勢を示したサラフィー主義者をサラフィー・ジャディードと記し、基本的にジハードを放棄するグループをサラフィー・ジハーディと記載しているが、これは後の文献でもサラフィー・ジャディードをより文民的な立場として記載していることからわかるように (Marchal and Sheikh 2015, 160)、逆である。

### 2-3. 紛争下のイスラーム法廷

マーカルは1994年以降のイスラーム法廷の活動に関する時期について、1994～1997年（第1期）、1997～2000年（第2期）、2004～2006年（第3期）の3期に分けている（Marchal 2009, 385）が、第1期は次のAIAIの影響力が残っていた時期である。イスラーム法廷の構成は単純で、首席、副首席判事が1名と4名の裁判官からなっている。これに加え、法廷の支援を受けた武装民兵（法廷民兵）（Court Militia）がある種の「警察」機能を代替し、法廷への届出や裁判の履行を補助するほか、法廷での活動とは別に地域でのもめごとに介入したり、「容疑者」を逮捕したりする活動を行うものである。このほかに、法廷の活動を財政的に支えるための財務委員会が設立され、「管轄」地域において活動する同じクランの商人などからの「税」の徴収にあたるといった、擬似的な行政機能を有する形で活動を行った。法廷自体が特定のクランと結びつくかたちで運営されていることから、クランからの一定の自立性を確保できるかたちを実現できない場合、そのクランの利益や意向に反した形の判断を示しにくい限界があった。ここには、スーフィー信仰、アル・イスラー、そしてサラフィー主義の関係が垣間見られる。法廷における裁判自体はスーフィーやアル・イスラーの勢力を中心に行われるが、その設立や武装民兵の活動にサラフィー主義の影響がみられるというのが基本構図である。

イスラーム法廷が本格的に活動を開始したのは1994年以降とみられている。1994年以前は、首都以外でもAIAIがゲド（Gedo）の中心都市ルーク（Luug）や、港湾都市マルカで短命ながらAIAIの司令官であったハッサン・ダヒール・アウエス（Sheekh Xasan Daahir Aweys）がイスラーム法廷を樹立する動きをみせていた（Marchal 2009, 384-385）。また、上述のハッサン・ターキも同様の法廷を設立するなど、AIAIの主要人物が初期の段階ではイスラーム法廷の設立に積極的にかかわっていた。この第1期には、スーフィーの新興勢力も多く含まれていた。アフマディー教団のシェーク・アリ・ダヒール（Sheikh Cali Dhere）やカディリー教団のシェーク・アブディ・アラソー（Sheikh Cabdi Alasow）らが、イスラーム法廷の指導者に名を連ねていた。1997年にはスーフィー信仰が影響力を有していたシェーク・アリ・ダヒールのイスラーム法廷にも積極的な関与を行い、結果的にモガディシュ北部において法廷の指導者の一部とクランの有力者の武力

対立に発展し、シェーク・アリ・ダヒールはスーフィー信仰の支持者を失う結果にもつながった (Marchal and Sheikh 2013, 226)。

新たなイスラーム法廷樹立の動きがみられたのは1997年からで、用意周到にイスラーム法の適用を優先した時期であった。特定のクランとそこに結びついたサラフィー主義者のミドルランクのビジネスマンが影響力をもつイスラーム法廷というかたちで、クランが影響力を行使している地域ごとに設立された (Marchal and Sheikh 2015, 150)。ただし、こうしたイスラーム法廷は、サラフィー主義者の観点からは、真正なシャリーアの行使主体とは見なされなかった。他方で、以下で述べるアル・スンナー・ワル・ジャマー (Ahlu Sunna Wa L-Jama'a: ASWJ) を中心として、モガディシュ北部においては複数のスーフィー教団の協力体制の下で活動が行われ、モガディシュ南部ではムルサード (Murusade) というクランによって設立されてイスラーム法廷においてスーフィー教団とアル・イスラーの協力体制のかたちでの法廷運営が実施された (Marchal and Sheikh 2013, 226)

ここで設立されたイスラーム法廷は、アラブ諸国の支援を得てジブチで交渉が行われたアルタ・プロセス<sup>8)</sup>の結果として親イスラーム勢力を中心として2000年に樹立された暫定国民政府 (Transitional National Government: TNG) の下に一時統合された (Marchal 2011a, 264)。この背景には、TNGの大統領に選出したアブディ・カシム・サラード・ハッサン ('Abd al-Qāsim Salaad Ḥasan) がアル・イスラー、ムスリム同胞団と極めて近い宗教的な立場にいる人物だったことが挙げられる。これに加え、この政権の傘下に法廷が積極的に参加したのは、アルタ・プロセスに積極的に関与を示していたムスリム同胞団の影響がこの時期のイスラーム法廷にも依然として及んでいることを示した (Marchal and Sheikh 2015, 151)。その後TNGは所期の成果を挙げることができないうまま、2003年までの期限をもって終了を余儀なくされた。この失敗とともに、ソマリアにおいてその影響力を示してきたアル・イスラーは、サラフィー主義との競合にさらされることになった (Marchal and Sheikh 2013, 223)。

---

8) 1999年9月から2000年にかけて隣国ジブチがイニシアティブをとって行われたソマリア国民平和会議であり、開催都市の名前に因み通称アルタ・プロセス (Arta Process) と呼ばれた。

設立過程においてムスリム同胞団を含むイスラーム主義勢力が排除され、TNGとは性格も大きく異なる暫定連邦政府（Transitional Federal Government: TFG）が設立（2004年）されたことを受け、イスラーム法廷連合は新たな展開をみせることになった（第3期）。この時期の特徴は、これまでクランを中心に展開してきたシャリーアの適用をクランの規則の制約を受けずに行うという必要性がみられた点にある。そして、この時期のイスラーム法廷の活動と並行するかたちで、Harakat Al-Shabaab Al Mujaheddin(以下、アッシャバーブ)は、その活動のかたちを整えつつあった（Marchal and Sheikh 2015, 154）。

その後2004年5月に首都モガディシュに5つ再建されたイスラーム法廷の間で、さまざまなイスラーム運動の指導者から構成される法廷協議会（Joint Courts）が設立され、63名の宗教指導者、クランの長老、ビジネスマンなどからなる諮問委員会（Consultative Group）の監督の下で活動を行った。それぞれイスラーム法廷の下で活動していた各80名の法廷民兵、合計400名が法廷協議会の下での活動を行うことが合意されたほか、各法廷はそれぞれ40名ずつの法廷民兵を予備役として獲得することを決定した。加えて、それぞれの法廷は3台から5台の「テクニカル」と呼ばれるソマリア内戦で用いられる武装車両を拠出し、法廷協議会全体で19台の「テクニカル」を所有し、治安維持に当たるかたちを整備した。この法廷協議会が、イスラーム法廷連合（Union of Islamic Courts: UIC）であり、その軍事力を背景として支配領域の拡大と支配領域内の治安の提供を行い、勢力を拡大したのである（Le Sage 2005, 47-48）。このUICは2006年前半にソマリアの中南部を広く統治下に置いたが、さまざまな勢力を糾合した緩やかな連合体という性格を有していた。

イスラームの観点からは、UICは執行部議長（Executive Committee Chairman）は、この当時ASWJとつながりを有し（ICG 2005, 20）、後にTFGの大統領に就任しシェイク・シャーリフ・シェイキ・アーメド（Sheekh Shariif Sheekh Axmed）に加え、サラフィー主義者のシェーク・ハッサン・ダヒール・アウエスも含まれており、必ずしもイスラームとしての同一の指向性を有してはいなかった。UICのなかで、軍事面では、資金面、武器の調達面においてはほぼアウエスがコントロールしていたことにもみられるように、サラフィー主義者はイスラーム法廷における軍事部門でその存在を際立たせる傾向がみられた。

しかし、2006年12月には、南西部の都市バイドア (Baydhabo) に拠点を置いていたTFGとUICとの間の武力衝突が激化し、2006年末には圧倒的な軍事力を背景としTFGを支援する隣国エチオピアが自衛を目的に宣戦布告をして武力介入を行った。エチオピア軍はUIC拠点に空爆を行ったほか、2007年1月にはアメリカの支援も受けてTFGを支援して首都モガディシュを制圧し、南部を軍事的に掌握する局面を迎えた。UICは短期間で駆逐された。

UICの掃討とTFGの樹立の過程でもたらされたエチオピア軍の駐留の長期化、そしてTFGの反イスラーム姿勢は、次節で述べるように、サラフィー主義者を中心としたイスラーム主義勢力の勢力拡大をもたらすとともに、新たなTFG樹立に向けた和平交渉への対応におけるスーフィー信仰を掲げるイスラームとサラフィー主義者の分断、あるいは細分化を助長する結果をもたらす結果となった。

## 3 アッシャバーブの台頭

### 3-1. アッシャバーブとサラフィー主義

アッシャバーブの創設を2004年頃とする時期とする見方がある。この年に、アウエスを中心として法廷民兵の軍事訓練を行う野営地が設立され、とくにクランへの忠誠を減じるような方向での訓練の実施が目指された。そこに設立されたのが、「イスラーム法廷の軍隊」(Mu'askar Mahkamad) であり、これが後に「若者の集団」(Jamaa'a al-Shabaab) と改名されたことが、アッシャバーブの起源になったというのである (Marchal 2009, 388)。「イスラーム法廷の軍隊」が設立された時には、1990年代末以降武力を維持した活動を展開していたアル・イーティサームの幹部の多くもこの活動に加わった (Marchal and Sheikh 2015, 159)。

アッシャバーブの確立に重要な意味をもったとして指摘されるのが、2005年2月の「イタリア人墓地」(Italian cemetery) の危機と呼ばれる「事件」である。この「事件」は、以下のように極めて倒錯した図式になっている。2004年12月にイタリアの沿岸でソマリからの移民（を目指した人々）が溺死し、それに対してイタリアではイスラームに則った葬儀が執り行われた。これに対し、アッシャ

バーブの指導者達の一部が非イスラームの人々（ここではイタリア人に限定されない）に対して同様の敬意を払うことがないことを示すために首都モガディシュの通称「イタリア人墓地」を掘り返し、埋葬されていた骨を廃棄したのである。この際に有力なイスラーム法廷であるイフカ・ハラーン (Ifka Halane) 法廷の2台の「テクニカル」が用いられたほか、アッシャバーブの指導者であったアイロ (Aaden Xaashi Faarax Ceyroow) を中心に、前述のムスリム同胞団系のタクフィール・ワ・ヒジュラが関与したとされる (Marchal 2011a, 266)<sup>9)</sup>。その跡地には、若い民兵の軍事訓練を行うマドラサを建設し、そこで様々な不満や不遇な境遇にある若者の教練を実施するかたちで、アッシャバーブの組織化を図った。そして、この時期には外国人部隊も流入し始め、さらにイスラーム主義に対抗しようとする勢力の殺害への関与もみられ始めた (Marchal 2009, 389-90)。

また、先に触れたUICの最高意思決定機関である執行評議会 (Executive Council) の18名のメンバーのなかには、少なくともAIAIまたはアッシャバーブのメンバーが最低6名含まれていた。このなかには、後にアッシャバーブのリーダーとなる<ゴダネ><sup>10)</sup> (Axmde Cabdi 'Godane') が事務局長として、また宗教指導者として知られる<ションゴール> (Fu'aad Maxamed Khalaf 'Shongole') が教育担当として含まれていた (Marchal and Sheikh 2015, 156)。

2006年のエチオピア侵攻・駐留の結果、アッシャバーブは2006年のUICの中南部ソマリアでの統治下での振る舞いに比べより強硬で非寛容な姿勢を示すようになった。その一例として、2006年段階でキスマヨを統治下に置いた際にはスーフィー信仰を明示的には禁止しなかったものの、2008年には、以下でみるようにスーフィー信仰において重要な聖者の廟の破壊を行うなど暴力的な対応をとったことが挙げられる (Marchal and Sheikh 2015, 157)。そして、2009年1月に新たなTFGが設立されるとともに、駐留していたエチオピア軍が撤退したこ

---

9) ただし、タクフィールの考え方をサラフィー主義の下でより実践的にそのイデオロギーのなかに取り入れるようになったのは、2009年のシェイク・シャーリフの下での新たなTFG政権の樹立と関係しているという見方がある (ICG 2010, 4)。

10) ソマリアでは、本人を特定するためのニックネームが用いられることが多い。その場合、欧文での表記は'Godane'のようになるが、本章ではわかりやすくするために<>でくくる表記を採用する (遠藤 2015を参照)。

とを受けて、アッシャバーブの動きはより活発化の度合いを強めた。ハンセンは2009年から2010年の時期をアッシャバーブの黄金期 (Golden Age) と評価している (Hansen 2016, 73)。詳細は他に譲るが (Hansen 2016; 遠藤 2015), アッシャバーブの台頭の下で、残されたイスラーム主義勢力を糾合する形で形成された、2009年にアウエスが中心になって設立したイスラーム党 (Hizbul Ismlam: HI) が2009年12月にアッシャバーブに統合されたことは、サラフィー主義者の軍勢力が基本的にはアッシャバーブに独占されることになったことを意味した。

アッシャバーブは極めて「官僚主義的組織」という見方も示されてきた (Marchal 2011b, 18)。メンバーになる際に、履歴書 (CV), 身分証明書 (ID) に加え、親類の電話番号の提出を求められるうえに、給与水準, 結婚, 休暇などに関わる体系的な内部規定が存在する。そのほかにも、最高意思決定機関としての最高評議会としてのシュラ (Shura) の存在や、「行政機関」として複数の「省庁」(Maktabs) の存在にその特徴がある<sup>11)</sup>。こうした代替的な「行政」機能が存在することによって、アッシャバーブは2009年以降、一定の領域統治を実現可能としている。また、強硬な宗教的な教義としてのサラフィー主義をもっているものの、統治に際しては現地の長老との協議を行うという点も一定の受け入れと現地での正統性を確立するうえでのひとつの重要な特徴とみられる (ICG 2014, fn.40; Hansen 2016, 86)<sup>12)</sup>。

しかし、2010年9月にアフリカ連合ソマリアミッション (AU Mission in Somalia: AMISOM) をターゲットとして行われたラマダンの攻撃 (別名 Nahatyatu Muxtadiin「背教者の終焉」) は、結果的にはアッシャバーブにとっては2006年以降最大の打撃となる攻撃であった (Hansen 2016, 100)。そして、この攻撃の失敗は、アッシャバーブとアル・イーティサームとの関係を悪化させるものでもあった。ここで大きな争点になったのは、アメリカとその地域的な協力者であるAMISOMの脅威をめぐる問題であった。この段階においては、アル・イーティサームはサラフィー・ジャディードに近い立場に変更し、ジハードにより否定的で、より非戦闘的な手法 (civilian approach) にその立場を修正する動き

11) この点の詳細については、Marchal (2011b) を参照のこと。

12) この時期(「黄金期」)のアッシャバーブの組織概要については、Hansen (2016, Chapter 6) を参照。

がみられていた。アッシャバーブは依然としてサラフィー・ジハードの立場を維持し、こうした脅威へのジハードを進める方針を維持して、サラフィー主義イデオロギーの独占を試みていた (Marchal and Sheikh 2015, 160-161)。

その後、モガディシュでは国際社会の支援を受けた新政府樹立の動きが加速していた2012年9月末の戦闘 (Operation Sledge Hammer) で、アッシャバーブの財政上極めて重要であったキスマヨを失った。当時、キスマヨの喪失は、アッシャバーブの活動を経済的に制約する可能性も指摘されたが、実際はそのようにはならなかった。アッシャバーブは、キスマヨを介した湾岸諸国との木炭取引により極めて大きな収益を上げていたが、その取引活動に関わり、ビジネス面で支配的な影響力をもつサラフィー主義者の支援を継続的に得られる仕組みに支えられてきた面もあった (UNSC 2013, 46; Marchal and Sheikh 2015, 162-163)。ソマリア北部のソマリランドやプントランドでも暴力は歓迎しないものの、サラフィー主義の支持者は増加傾向にあるとみられている (Marchal and Sheikh 2015, 162)。

こうした宗教的背景や、先に挙げた組織的特性を踏まえ、またソマリア国内におけるAMISOMの活動に伴う民間人の犠牲や近年のトランプ政権によるアッシャバーブへの無人機による攻撃などへの批判なども考慮すると、アッシャバーブは、軍事的にはソマリア国軍をしのぎ、その支配領域における公共財提供も実施するかたちで (Marchal 2018)、政治的により正当性をもち得る主体となりつつあるとみる研究も出てきている (Ingiriis 2018b)。そして、アッシャバーブの勢力は、深くソマリア社会に浸透することによってとソマリアの一般市民を区別することも困難になりつつあるという認識も存在するにいたっている。

### 3-2. アル・スンナー・ワル・ジャマー (ASWJ)

ASWJはイスラームの改革勢力の台頭に抗するために、伝統的なスーフィーの指導者によって1991年に設立された。この前段階に設立されたMajma' 'Ulimadda Islaamka ee Soomaaliya(ソマリアイスラーム学会議)への参加者のなかで、当時南部でAIAIと対峙していたアイディード (Maxamed Faarax Caydiid) の率いるUSCを支持する勢力が分裂するかたちで創設されたとみられている (ICG 2005, 15-16)<sup>13)</sup>。

ASWJは、2002年に政治的に動機づけられたスーフィー教団出自のシェークが参加し、伝統的なイスラーム解釈を支持する近代的な政治団体という性格を強めるまでは、ほとんど知られることがなかった (ICG 2005, 16) とみられている。しかし、上述のように、ASWJは、複数のイスラーム法廷の運営においても重要な役割を水面下で果たしてきた (Marchal and Sheikh 2013, 226)。なお、ASWJは単にスーフィー支持の勢力というだけではなく、ソマリア中部のヒラーン (Hiiraan) やガルグドゥード (Galguduud) に居住するハウィヤの主要クランであるハブルゲディル／アイル (Habr Gedir/Ayr) などが集結したクラン連合という性格をも有している (ICG 2010, 13)。その意味では、宗教的な勢力になかにもソマリアの文脈で重要なクランの関係が色濃く影を落としている<sup>14)</sup>。

2008年以降、ASWJ は、TFG, ならびにエチオピアとの協力の下で、アッシャバーブと対峙する勢力として知られることになる。2008年10月には、とくにキスマヨを中心にアッシャバーブはキスマヨのキリスト教会のほかスーフィー信仰における著名なシェークの廟を18以上破壊するといった行為に及んだことから、スーフィー教団は組織的にアッシャバーブに武力を用いて対抗する姿勢に変化した。そしてこうしたアッシャバーブのジハード主義的な行動は、信仰における試練 (fitna) の機会を与えているという解釈の下、ASWJにとっては到底容認できるものではなかった (Marchal and Sheikh 2013, 228)<sup>15)</sup>。エチオピアに支援されたASWJは2008年12月にガルグダグのエチオピア国境に近いグリーール (Guri-Ceel) でアッシャバーブと交戦している (Marchal and Sheikh 2015,

---

13) マーカルらは、この解釈を幾分修整した見方をとっている。ASWJという名称のついた最初の政治組織が設立されたのは1992年であり、アイディードがその創設者という解釈である。当時USC内でアリ・マフディ・モハメド (Cali Mahdi Maxamed) と対立・分裂する一方で、AIAIと対峙していたアイディードはASWJ創設によってスーフィー教団の組織化を図り、イスラーム改革派により効果的に対応することを目指したとみている。具体的にはカディリー教団を組織の中心とするとともに、アフマディー教団から指導者を任命し、自らの出自のクランでハブルゲディル／アイルの団結と2つのスーフィー教団の協力のもとに自らの基盤固めを狙ったものとされる (Marchal and Sheikh 2013, 224-225)。

14) ムスリム同胞団やサラフィー主義といったイスラームの拡大は、ソマリ社会に根ざすクラン関係と無関係ではないとする指摘は繰り返し行われている (Hansen 2015; Renders 2007)。

15) なお、より世俗的な観点からはアッシャバーブがカート (khat) を噛む習慣を禁止することへの懸念も関係したと指摘されている (Marchal and Sheikh 2013, 228)。

157)。

2009年12月には、エチオピア国境に近いガルグドゥードのアーブドワーク (Cabudwaaq) でASWJ会議が開催され、クランを通じてすべてのタリーカが招待された。ここには、ASWJの創設に関わった（その当時サウジアラビアやヨーロッパ、アメリカなどに在住の）ディアスポラ、それにアッシャバーブの統治に対抗を迫られていたソマリアの各地域からの代表が出席していた。なお、ここに含まれていたのはガルグドゥード南部、ヒラーン、モガディシュ、ローアー・シャーベル (Lower Shabelle)、ミドル・ローアー・ジュバ (Middle and Lower Jubba)、そしてゲドの各地域であった<sup>16)</sup>。ここで、43名からなるシューラが設立されるかたちでAWSJの新たな組織が発足したものの、組織の一体性や、地域的なイスラームへ指向性の相違などの課題が発足当時から存在していた。この会議への参加手続や出席への手当額で折り合うことができなかったガルグドゥード南部の事例は興味深い当時の状況を示している (Marchal and Sheikh 2013, 229-230)。

また、ガルグドゥード南部やベイ (Bay) とバコール (Bakool) はタリーカ教団の影響が強く、サラフィー主義への転向の傾向は極めて低いものの、行政機構の弱さから、アッシャバーブの一定の活動がみられるほか、ゲドのように、アル・イーティハドが一定の影響力を有していた時代があり、サラフィー主義が根を張っている地域があるなど (Marchal and Sheikh 2013, 230-231)、ソマリアにおけるイスラームは地域的な多様性を帯びる状況が生み出されていた。

### 3-3. 連邦政権の樹立とイスラームの政治的競争

上述のように、アッシャバーブとは異なり、サラフィー主義勢力のなかでも非戦闘的な手法を模索するようになったアル・イーティサームは、TFGやその後のソマリア連邦政府 (Somali Federal Government: SFG) 樹立にかかる西側諸国やエチオピアなどの外部勢力の動きのなかで、軍事的ではなく、より政治的な形

---

16) ベイ (Bay) とバコール (Bakool) は似た状況にはあったものの、アッシャバーブと対峙していたのはASWJではなく、エチオピアの支援を受ける暫定連邦政府の部隊や民兵組織であった (Marchal and Sheikh 2013, 238 fn25)。

での関与を求めようとする動きもみせていた。ここに、水面下で活動を継続してきたムスリム同胞団系の勢力との間な新たな競争が始まることになった。

現状におけるソマリアにおけるイスラームを検討するうえでも重要な画期として位置づけられるのが、2012年9月に設立された新連邦議会において新大統領としてハッサン・シェイク・モハムッド (Xasan Sheekh Maxamuud) が選出され<sup>17)</sup>、11月のソマリア連邦政府樹立が行われたことである。このときの選挙ではTFGの大統領であったシェイク・シャーリフ再選の可能性も指摘されていたにもかかわらずの選出であった。ハッサン・シェイク・モハムッドは、2000年代以降その影響力を失っていたとみられてきたムスリム同胞団系のアル・イスラーの分派とみられる勢力である「新しい血」という意味のダムル・ジャジード (Damul Jadiid) に属する人物であった (Marchal and Sheikh 2015, 161)。ブライデンは、ダムル・ジャジードは外からはわかりにくい組織 (introverted organization) であるものの、大統領を含め複数の主要閣僚がダムル・ジャジードの構成員であるという見方を示している。同時に、SFGの外交関係における変化として、これまでソマリアの和平の実現に関与してきた地域機構である政府間開発機構 (Inter-Governmental Authority on Development: IGAD), AMISOM からアラブ諸国 (カタール, エジプト) とトルコに外交関係の軸足を動かしつつあることを指摘していた (Bryden 2013, 8)。

ソマリアの現状においては、SFG政権はムスリム同胞団系の影響力 (外部勢力としてはカタールとトルコ) が強い状況となる一方で、スーフィー教団の影響の強いASWJの支配地域 (外部勢力としてはエチオピア), そしてサラフィー主義のビジネスコミュニティが影響力を有している地域 (外部勢力としてはUAEとサウジアラビア), そしてアッシャバーブの影響力の及ぶ地域といったかたちで、イスラームの多様な併存状況が生み出されている。そして、本章では詳述しないが、2017年に発生したカタールの断交問題という中東国際関係の影響が及びやすい

17) この選挙には、カタールの資金が影響しているとの指摘がなされている。その仲介役が、もともとAIAIの戦闘員であったファハド・ヤシン・タヒール (Fahad Yasin Tahir) とされる (Cannon 2018, 24)。ファハド・ヤシンはハッサン・シェイク・モハムッド政権下では重用されず、2018年大統領選挙で選出された大統領<ファーマジョ> (Maxamed Cabdulaahi Maxamed 'Farmajo') を強く支持した人物でもあった。

環境が新たに生まれており、「アフリカの角」地域の政治力学の再編の動きにもつながっている（遠藤 2020）。

## おわりに

本章では、もともとスーフィー信仰から始まったソマリアにけるイスラームは、シアド・バーレ体制、「崩壊国家」経験、新政府樹立（暫定政権・連邦政権）といった歴史的な変化のなかで、中東諸国におけるイスラームの改革運動の影響を受けながら、大きく変化してきたことを確認した。結果的に、現状においてはイスラームが地域的に多様な様相を示している。では、初めの問い立てのひとつに改めて戻ろう。「なぜ、アッシャバーブはソマリアにおいて一定の勢力を維持し続けているのか？」

以前の研究では、さまざまな浮き沈みを経ながら、ソマリアの中・南部地域において、アッシャバーブはソマリアという文脈にうまく適応してきた面をもっており、組織化や制度化を進めてきたことが、その領域的な支配につながってきたことを評価した（遠藤 2015）。限定的とはいえ、現地におけるアッシャバーブへの支持につながっている点は、「政府」が不在ななかでのひとつの自生的な秩序を形成する姿を示すもので、単にテロ集団としてのみ捉えることへの留保を提示した。

本章でみてきたように、ソマリアの政治変容をイスラームという観点から捉え直した場合、アッシャバーブは、サラフィー主義というイスラームの考え方をソマリ社会に問う役割を果たしてきた点にも留意すべきであろう。ジハードを唱え、暴力的な手段を用いる点に関しては、ソマリア社会のなかでも必ずしも評価されない点はあるものの、ソマリ社会におけるイスラームを問おうとする部分を、アッシャバーブから切り離すことは困難な状況にあることも確かであり<sup>18)</sup>、政治的な観点からもその主体性が再評価されつつあることはすでに指摘したとおりであ

---

18) この点に関して、マルーフとジョセフの質問に対する答えとして、本章でも参照してきたマーカルは、類似の見解を示している (Maruf and Joseph 2018, 280)。

る (Ingiriis 2018b)。今後、サラフィー主義のなかでより文民的な方向に転じたアル・イーティサームのように非暴力的な指向性を有する勢力が改めて台頭する契機があるかは未知数であるが、アッシャバーブの宗教的な役割を大きく修正する機会が訪れることがなければ、その存在が完全に失われることは困難であり、アッシャバーブは長期にわたり存続する政治勢力と考えざるを得ない。それゆえにこそではあるが、近年において、政策的にアッシャバーブとSFGの間での何らかの政治交渉の可能性を模索する検討も行われてもおり (Mankhaus 2018; Göldner-Ebenthal 2019)、今後のソマリアにおける「安定化」の実現の道筋を示すことになるのか、改めて注視する必要が求められる段階に至っている。

#### [参考文献]

##### 〈日本語文献〉

- 遠藤貢 2015.『崩壊国家と国際安全保障：ソマリアにみる新たな国家像の誕生』有斐閣。  
 —— 2020.『『アフリカの角』と地政学』北岡伸一・細谷雄一編『新しい地政学』東洋経済新報社, 307-342。  
 藤井千晶 2018.『東アフリカにおける民衆のイスラームは何を語るか——タリーカとスンナの医学』ミネルヴァ書房。

##### 〈外国語文献〉

- Abdullahi, Abdurahman 2015. *The Islamic Movement in Somalia, A Study of the Islah Movement 1950-2000*. London: Adonis & Abbey Publishers.  
 Brons, Maria H. 2001. *Society, Security, Sovereignty and the State in Somalia, From Statelessness to Statelessness?* Utrecht: International Books.  
 Bryden, Matt 2013. *Somalia Redux?: Assessing the New Somali Federal Government*, Washington, DC: CSIS.  
 Bryden, Matt and Premdeep Bahra 2019. “East Africa’s Terrorist Triple Helix, The Dusit Hotel Attack and the Historical Evolution of the Jihadi Threat.” *CTC Sentinel* 12(6): 1-11.  
 Cannon, Brendon J. 2018. “Foreign State Influence and Somalia’s 2017 Presidential Election, An Analysis.” *Bildhaan* (18): 20-49.  
 Göldner-Ebenthal, Karin 2019. *Salafi Jihadi Armed Groups and Conflict (De-) escalation, the case of Al-Shabaab in Somalia*. Berlin: Berghof Foundation.  
 Hansen, Stig Jarle 2013. “Transborder Islamic Activism in the Horn of Africa, the Case of Tadamum – the Ethiopian Muslim Brotherhood ?” In *Muslim Ethiopia, The Christian legacy, Identity Politics and Islamic Reformism*, edited by Partick Desplat and Terje Østebø, New York: Palgrave-

- Macmillan, 201-214.
- 2016. *Al-Shabaab in Somalia: The History and Ideology of a Militant Islamist Group*, 2nd edition. London: Hurst.
- Harper, Mary 2019. *Everything You Have Told Me is True: The Many Faces of Al-Shabaab*. London: Hurst.
- ICG 2005. *Somalia's Islamists*, Africa Report, No. 100, Nairobi/Brussels, ICG.
- 2010. *Somalia's Divided Islamists*. Africa Briefing No.74, Nairobi/Brussels: ICG.
- 2014. *Somalia, Al-Shabaab – It Will Be a Long War*. Africa Briefing No.99, Nairobi/Brussels: ICG.
- Ingiriis, Mohamed Haji 2018a. “The Invention of Al-Shabaab in Somalia, Emulating the Anti-Colonial Dervish Movement.” *African Affairs* 117 (467): 217-237.
- 2018b. “Building Peace from the Margins in Somalia, The Case for Political Settlement with Al-Shabaab.” *Contemporary Security Policy* 39 (4): 512-536.
- Jones, Seth G., Andrew M. Liepman, and Nathan Chandler 2016. *Counterterrorism and Counterinsurgency in Somalia: Assessing the Campaign Against Al Shabaab*. Santa Monica, CA: RAND Corporation.
- Keating, Michael and Matt Waldman eds. 2018. *War and Peace in Somalia: National Grievances, Local Conflicts and Al-Shabaab*. London: Hurst.
- Le Sage, Andre 2005. *Stateless Justice in Somalia: Formal and Informal Rule of Law Initiatives*. Geneva: Centre for Humanitarian Dialogue.
- Lewis, Ioan 1998. *Saints and Somalis, Popular Islam in a Clan-Based Society*. London: Haan.
- Lyons, Terrence, and Ahmed I. Samatar 1995. *Somalia: State Collapse, Multilateral Intervention, and Strategies for Political Reconstruction*. Washington, D.C.: Brookings Institution.
- Marchal, Roland 2009. “A tentative Assessment of the Somali Harakat Al-Shabaab.” *Journal of East African Studies* 3 (3): 381-404.
- 2011a. “Joining Al-Shabaab in Somalia.” In *Contextualizing Jihadi Thought*, edited by Jeevan Deol and Zaheer Kazmi, New York: Columbia University Press, 259-274.
- 2011b. *The Rise of a Jihadi Movement in a Country at War: Harakat al-Shabaab al Mujaheddin in Somalia*. Paris: SciencesPo, Mimeo.
- 2018. “Rivals in Governance, Civil Activities of Al-Shabaab.” In *War and Peace in Somalia: National Grievances, Local Conflicts and Al-Shabaab*, edited by Michael Keating and Matt Waldman, London: Hurst, 349-358.
- Marchal, Roland and Zakaria M. Sheikh 2013. “Ahlu Sunna wa l-Jama’a in Somalia.” In *Muslim Ethiopia: The Christian legacy, Identity Politics and Islamic Reformism*, edited by Partick Desplat and Terje Østebø, New York: Palgrave-Macmillan, 215-240.
- 2015. “Salafism in Somalia: Coping with Coercion, Civil War and its Own Contradictions.” *Islamic Africa* (6): 135-163.
- Maruf, Harun and Dan Joseph 2018. *Inside Al-Shabaab: The Secret History of Al-Qaeda's Most Powerful Ally*. Bloomington: Indiana University Press.

- Menkhaus, Ken 2018. *Elite Bargains and Political Deals Project: Somalia Case Study*. Report for UK Stabilisation Unit.
- Murphy, Martin N. 2011. *Somalia: The New Barbary, Piracy and Islam in The Horn of Africa*. London: Hurst.
- Renders, Marleen 2007. "Global Concerns, Local Realities, Islam and Islamism in Somali State under Construction." In *Islam and Muslim Politics in Africa*, Benjamin F. edited by Soares and René Otayek, New York: Palgrave-Macmillan, 47-61.
- Tadesse, Medhane 2002. *Al-Ittihad, Political Islam and Black economy in Somalia*. Addis Ababa: Meag Printing Enterprise.
- UNSC 2013. *Report of the Monitoring Group on Somalia and Eritrea pursuant to Security Council Resolution 2060* (2012) 文書番号S/2013/413.

本書は「クリエイティブ・コモンズ・ライセンス表示-改変禁止4.0国際」の下で提供されています。  
<https://creativecommons.org/licenses/by-nd/4.0/deed.ja>



